

やすお じいちゃん物語

岩手医科大学神経内科・老年科准教授 高橋 智





あるところに、もの忘れが始まった、やすお じいちゃんが
家族に囲まれて暮らしていました。

『わしの万年筆、使っておらんか？』



1時間ほど前に、自分の部屋から万年筆を
持ち出して、客間で手紙を書き、**そのまま**
置きっぱなしにしてきたのですが、それを
忘れて、自分の部屋の万年筆がないと**怒っ**
て、探しています。

仕事から帰ってきたお父さん、イライラして
います。『何言ってるの、きのうも一昨日も
そう言っで、自分で置き忘れてたじゃないの
、俺だっで忙しいんだ
ぞ』って、1分間、
怒鳴っでいきました。

『ダメだよ、じいちゃん』



『じいさん、昨日も、おとといも、その前も……』

そういって、自分の部屋にあったじゃないか！



ボケてるんだから、自覚してっで言っでるだろ！』

それを聞いたおじいちゃん、『そうか、ま
ちがとったか！息子にも面倒かけないよ
うに気をつけよう』**とはなりません。**

『そうか、まちがとったか！これから気をつけよう。』



『困っているときに、怒鳴る怖い人・・・』



不快、恐怖



自分の部屋に戻ってきたおじいちゃん、何を言われたかは忘れたけれど、心の中に残ったのは、『ワシが困って助けを求めても、怒って返す怖い人』という不快な感情です・・・。

『困っているときに、怒鳴る怖い人・・・』



6か月後



このようなケアの繰り返しの中で、6か月のときが流れました。



『手を出してきたら、先に殴ってやる！』



おじいちゃんの心に残っていたのは、息子を見た時のこの人は怖い人という感情でした。しばらくすると、息子が介護で手を出そうとすると殴りかかって、介護への抵抗や暴力が始まりました。

『ワシや、あんな怖い人のいる家には帰らんぞー・・・・・・・・』



『あんな怖い家には居たくない』という思いから勝手に外出し、⁹

『ここは、どこじゃー・・・（徘徊へ）』



そして、おじいちゃんは町を徘徊するようになってしまいました。

その2

『わしの万年筆、使っておらんか？』



万年筆を、客間に置きっぱなしにしてきた
やすおじいちゃん、やっぱり忘れて、
万年筆がないと怒って、探しています。

仕事から帰ってきたお父さんと孫の健太君、またいつもの、もの忘れかなとは思いましたが、『一緒に探そう!』と優しい言葉をかけて、1分ほど探していましたがおじいちゃんは、万年筆のことを忘れて部屋にもどっていきました。

『おじいちゃん、
いっしょに探してみよう!』



『だいじょうぶ!ボクも手伝うよ!』

20:04:06



自分の部屋に戻ってきたおじいちゃん、『さ
つきは何かを探そうとしていたが・・・』、
何をしたかは忘れてしまったけど、心の中に
残ったのは、……………。

『おじいちゃん、
いっしょに探してみよう!』



『だいじょうぶ!ボクも手伝うよ!』



うれしいな

困ったときにやさしく助けてくれる人……。

やさしく、あたたかい感情です。

6か月後

このようなケアの繰り返しの中で、6か月のときが流れました。

『優しいみんなといっしょ、この家は楽しいなー』



もの忘れは少し進みましたが、やすお じいちゃんはみんなと楽しく暮らしています。